熊本の手芸品 肥後ずゐき（随喜）

肥後ずいきは、今からおよそ400年程まえ、加藤清正公の時代より今日まで受け継がれてきた熊本の手芸品です。昔からお土産品・趣向品として用いられてきました。
年月を重ね、現在のようなリング状のものは、肥後六花を形にしたと言われています。
今でもそれぞれの愛好家がいるほど親しまれて来た花々です。どうぞお楽しみください。

<<< 各手芸品の名称とお取り扱いのご説明 >>>

《肥後花菖蒲》－玉－

花しょうぶは、周りの紐をほどきます。玉の部分を中に押し入れて使います。玉が中で「ころころ」と踊り、一味違った感触。後は紐で引出します。

《肥後牡丹》－二重リング－

ぼたんは、二本の指先付けて使用し増す。また、輪を二重にして指先でご使用
になれます。

《肥後竜胆》－太リング－

りんどうは、指に付けて使用します。中に「舌状」を先にし、指の根元まで差込んだり、大きさによってはご自身に装着して使用します。

《肥後小菊》－花びら付－

こぎくは、基本的には指先につけて使いますが、リングに付いているヒダ状のものが中を刺激します。これもこけしに組合わせて使用できします。

《肥後菖蒲》－リング－

あやめは、指の先付けて使用します。また、こけし等に装着して、ご使用になれます。

《肥後山茶花》－小リング－

さざんかは、基本的には「りんどう」と同様ですが、これもこけし等に付けたり、組み合わせたりして使用します。

《ひも》－長もの－

長ものは、肥後ずいきの中で唯一原形を受け継いで来たと言われています。紐を中ほどから二本にし、ご自身に巻き付けて使いします。（巻き方の例は下記をご参照ください）

《小雀》－こけし－

こけし「棒状」のものは、張形と同様な役目を持っています。江戸時代の参勤交代では大変人気の高いお土産とされていたようです。リングや紐などを使い、独自の使い方ができます。

《ひも》－長もの－の巻き方

一、一番簡単な方法として、男性自身にぐるぐると巻き、根元で縛る方法です。
二、次の方法として、男性自身の先のほうから巻くときに、紐を交差させながら巻きます。
三、また、「二」の方法で巻きつける際、交差させるとき「結び目」を入れながら巻く方法です。この方法により、結んだ箇所が少し「突起物」となり、快感が得られます。
尚、結び目は、均等に上一列や、左右、下部に数箇所に作ると更にいいようです。
四、その他、上記の方法を組み合わせて使用いたします。
「こけし」に巻いたりもできます。
（ご注意）紐は強く引っぱたりすると切れたりします。

※ご使用前に必ず、ぬるま湯または、水に四～五分程度浸し、軽く水を切り使用致します。
乾燥しているときは、繊維そのものが植物です。
また結び目が木綿糸により作られておりますので、お取り扱いにはお気をつけ使用くださいますよう、お願い申し上げます。
再使用は衛生の面からもお控えをお勧め致しますが、万が一お使いをご希望される場合、ぬるま湯で洗浄し、必ず陰干しをお願い致します。

肥後ずいき専門店
熊本096-213-5278